

6 Sylvius の解剖学書における分類と名指し

澤井 直

順天堂大学医学部解剖学第一講座

Sylvius の名が知られる Jacques Dubois (1478-1555) は、一六世紀前半のパリ大学で活躍した医学者・解剖学者であり、Andreas Vesalius (1514-1564) や Ambroise Paré (1510-1590) への影響で著名である。特に Vesalius と比較されることが多いが、Vesalius を新たな解剖学の出発点とする見方が大勢を占める中、Sylvius は Galenus に盲従し、実際の観察よりも書物を重視する旧来の解剖学者として評価されることが多かった。

この評価は Galenus の記述した人体構造が誤っていたと Vesalius が指摘したことに對して行った Galenus の擁護を見る限りでは納得できない。Sylvius は人体の構造と自身が変化したために Galenus の記述した人体構造と当時の解剖で観察された人体構造との間に齟齬がある、

という論によって Galenus の権威を守ろうとしたのである。このような ad hoc な議論によって Galenus の権威を守ろうとしたことが Sylvius の評価を低くし、その解剖学の内容も Galenus の引き写しとされてきた。

しかし、このような「Sylvius = 旧来の解剖学、Vesalius = 新たな解剖学」という評価は両者の違いを明示する一つのエピソードを大きく取り上げすぎていると思われる。実際、Vesalius の解剖学はその方法、内容において多くを Galenus に負っていることが近年注目されている。また Sylvius は、『ヒポクラテスおよびガレノス生理学の解剖学的部分に対する梗概』(In Hippocratis et Galeni physiologiae partem anatomicae isagoge, 1542) という Galenus の解剖学を簡便にまとめた解剖学書において、人体の各部位の名前を提示し、簡単な説明を行っている。その際、Galenus が骨には名前を与えたが、筋肉・血管・神経には名前がつけられていないので自分でつけたと述べ、Galenus にはない新たな名前を提示している。Sylvius が与えた名前は、Vesalius のものを駆逐し、今日でも多くが解

剖用語として残っている。Galenus 解剖学の内容に多くを依存しながらも単なる Galenus の解剖学の引き写しではないのである。

このような点に注意しながら Sylvius 解剖学を考えると重要なのが Galenus をどのように読んだか、そして読んだ内容をどのように表現したかという問題である。

Galenus は『解剖学指南』(De anatomicis administrationibus)、『諸部分の有用性』(De usu partium)において腕を扱う章、手を扱う章というふうに関所解剖学的に章を分けて人体構造を記述する。各章ではその部分にある骨や筋肉、血管などの構造が記述される。他方、Sylvius は骨を扱う章、筋肉を扱う章というふうに関系統的に章を分け、さらにその章の中で「眼を動かす筋」や「腕を動かす筋」という下位のグループに分けて記述している。

Sylvius は Galenus の解剖学書の内容に基づきながらもまったく異なる仕方では人体の構造を表現している。Sylvius の表現は分類を重視し、また分類を明確に提示

するために表の形で各構造を表現している。そしてこの表の形による提示方法が新たな名前をつける必要を Sylvius に迫ったのではないかと考えられる。